

文芸OGネットワーク通信



Vol.10

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1
文芸OGネットワーク 代表 脇田 静子
発行：2009.2.7

共立女子大学文芸メディア研究室内
Tel/Fax 03-3237-2681
URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei

共立祭2008に参加

昨年10月18日(土)、19日(日)に神田一橋キャンパスにおいて、「共立祭」が開催された。文芸OGネットは発足以来参加しており、今回も卒業生の作品の展示とバザーを行った。



共立祭は、大学・短大の他、中学・高等学校、幼稚園との合同開催で、校友会も協賛の形で参加している。開催場所は本館を始め、全館に及び、体育館では全国物産展やカフェ、講堂では演劇、演奏、ファッションショーなどのパフォーマンスが繰り広げられ、学園周辺にまで華やかな雰囲気があふれていた。



大学・短大では「彩」というテーマで、サークルやゼミなど全47団体の展示や発表が行われた。

文芸OGネットの部屋の両隣は、絵本サークルによる創作絵本の展示、そして華道部古流による作品の発表があり、花束の販売も行ってた。

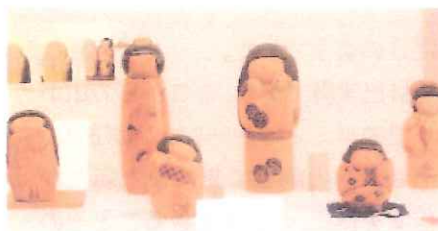
OGネットの展示は、山崎裕子さん(昭和54年卒)による創作こけし、村上智子さん(昭和38年卒)による鎌倉彫の作品であった。

山崎さんの作品は木のぬくもりを

活かした存在感のある童子のこけしで、見る人の心を和ませてくれる作品だった。村上さんの作品はお皿や茶托、手鏡など、生活の中に美しさを追究する姿勢がうかがえる作品であった。

なお、パネルだけの展示であったが、天使の造形作品を手がけている松本千穂さん(平成4年卒)の創作活動も紹介された。

バザーは今回も多くの方々に提供・寄付していただき、盛況だった。掘り出し物が多いせいか、毎年楽しみに来てくださる方もいるようだ。



山崎裕子さんの創作こけし



村上智子さんの鎌倉彫作品

細かい「彩」の字で構成されたポスターは川瀬治子さん(昭和52年卒)によるものである。

今回の共立祭では、初めての試みと



松本千穂さんの人形(パネル展示)

して、ステージ以外の企画で参加する団体に対し、1~2分のPRタイムが設けられた。OGネットも横断幕を手に表示紹介のアピールができた。



同窓生に会えた喜びも手伝って、終始和やかな雰囲気に包まれた二日間だった。



生け花
小池恵己子さん(S56卒)

つくるとは

村上智子(S38卒)



辞書で「つくる」をみるとたくさんの意味が記載されています。

別の新しいものを生み出すこと、例えば家をつくる、詩をつくる等、もう一つは無いものがあるようにする、例えば庭を秋の野のようにつくるとか、泣き顔をつくる、というように……こうしてみると「つくる」ことは、生きることに思えます。手先が不器用、絵が描けない娘の私が鎌倉彫を習うきっかけは、声をかけてくれた上司へのごますりでした。

その後結婚、子育てで生活で休むばかり、嫌な顔もせず教えていただいた先生には感謝で一杯です。稽古が終わり、先生手作りの美味しい料理をいただきながらの談笑が一番の楽しみでした。ある時先生は私の彫りを見て、「雑は雑なりに主張があるのね」と評しました。

私にとっての創作とは

松本千穂(H4卒)



困ったことに日常的に必要なことは一切まとも出来ない私が、絶大なパワーを發揮できることです。一時、創作なしに過ごした日々は、まるで、ただ、永らえている

先生が亡くなられた時20年ほど経っておりました。20年を大事に近くの鎌倉彫教室にまた通うことにしました。やめたら何も残らない、続けたら老後が楽しいと、やめないことに必死でした。

今度大学祭で我が稚拙作品を並べ、続いたなあと熱くなりました。単調な日々を自分のつくった皿や鉢を並べて食卓を飾れたらいいなあという思いは、正月をお節料理で祝う膳で実現しました。重箱、取り皿、箸、ビールの袴等々……思い描いたとおり日々自分の作った品を愛でながら使い、眺め、楽しんで生きていく私がいました。満足です。



櫛の美しさと木人形のかわいさに魅了され

山崎裕子(S54卒)

「こけしはただかわいければいいのだよ」

今は亡き恩師が常々おっしゃい

だけのような感じでした。

自己実現であり、そこからの広がりでのコミュニケーションがあり、そこからの刺激で更にまた新たな作品を作る。つまり生きることそのものです。以前に一度、「あなた自身がアートですね」と言われたことがあります。苦悩し、発見し、表現する、そんな自分自身が、ある意味では作品なのかもしれません。

具体的に言うと、私は人体が大好

しました。幼少期よく少年に間違えられる容姿の私でしたが、実はかわいい人形や動物が大好きな少女でした。そして今から16年ほど前、創作こけし作家の吉田多加志先生との出会いがありました。



先生の温厚なお人柄と、先生のかわいく、いきいきとした木人形に魅了された時の熱い想いは今も鮮明に蘇ります。

「好きな時、好きな様に削ってごらん」と、

先生は櫛の塊を一つ下さいました。縁あって私の手の中に委ねられた木。何百年何千年もの年輪を重ねた木はたとえ材木となっても、生命力を感じます。そして削る度に“はじめまして”と再び生まれ出て来る気がします。かわいい木人形の姿となって——。その時が創り手の最も至福の時です。

人は誰も自分を表現する手段を身に付けていると思います。自分にとって最適な表現方法を見つけられたら幸せです。木人形が私をそんな気持ちにさせてくれました。作品は今の私の心の表われです。作品達が次の私の世界を広げ、縁を紡いでくれます。

きで、機能面、精神面、外見すべてにおいての人間オタクなのです。その他の事には殆ど興味がありません。そんな私が、精神世界を表現するにあたって、天使をモチーフに、可動する人体そのものであるビスクドールを作ることは、これ以上にピッタリなことはないと思っています。見事なまでに、一体化しています。最近クロッキー会に入りまして、また新たな境地が切り開かれそうな感じでした。

本林先生を偲ぶ

日本文学を講じられた本林勝夫先生が昨年11月に亡くなられた。先生は、共立女子大学を定年退職された後、斎藤茂吉に関する研究を続けられ、一時斎藤茂吉記念館の館長を務められたこともあった。

昭和32年に卒業記念文集を編んだ折、本林先生から「みみしいの記」という随筆をいただいた。先生は幼少時に内耳炎を拗らせて、右耳の聴力を失われた。左耳をなるべく利かせようとする習性のために、記念写真などを見ると、常に顔が右の方へ廻っているという。母上はそれに非常に責任を感じておられたが、先生が軍隊に入られていた間は、ご自分の右耳に綿を詰めて日々を送られていたということも淡々と書かれていた。

それから約半世紀近く経た平成14年、一期生の同期会誌に再び執筆をお願いした時いただいたのが「福原先生

夫人のお手紙」という原稿だった。

福原麟太郎先生ご夫妻については故白洲正子さんがその追悼文で「絵に描いたような御夫婦」と評しておられるそうだが、先生はこれに全面的に賛同しておられる。

雛恵夫人は大英文学者を背後から支える、とても行きとどいたお人柄であったようだ。本林先生との交流のエピソードやお手紙の内容などもご披露して下さっている。

後日、先生から「むかしの人は、何事につけても、ねんごろでした。このごろの若い人には、あんな話はわかってももらえないでしょう。福原夫人その

人に面識があろうと、なかろうと、文芸学部一期生あたりならわかってくれると思って書いたのですが……」というお便りをいただいた。

自分の耳に綿を詰めて、息子の不自由を体験しつつけた母上、ご主人に寄り添って研究に貢献なさった雛恵夫人、表だった自己主張は控え、つつましく子供や夫を黙々と支える存在、先生の理想の女性像を垣間見る思いがする。

せめて一期生にはわかってほしいという、先生の特別の思いを受けとめて、心からご冥福をお祈り申し上げます。岡村和子(S32卒)

2008年9月、歌舞伎学会誌に私の小論文が掲載された。勿論指導教



授の推薦あったのである。それはそれとして、外部に発表できたことは理屈抜きに嬉しかった。

テーマは近代の日本舞踊の発生に大いに関わりのある「新舞踊運動」についてであった。

2005年私は文芸学研究科演劇学専攻の院生になった。社会人になって四十余年、仕事を始めとして、すべて中途半端であったことに、自分なりにけじめをつけたいと思ったからである。もう一度原点に戻って勉強してみようという素朴な願望であった。長年稽古を積みながら挫折した日本舞踊を研究対象として学びたいと思ったのである。

まずは入試という難関があった。四十余年の空白は長い。幸い社会人入試制度ができて語学試験は免除される。決意から一年、入試対策と論文用資料探しが始まった。生活費と学費の捻出のために仕事も続けた。我ながら奮闘したと思っている。

古稀の手習い

「日本舞踊研究」を目指して

百瀬 好子

大学院の授業では先生と一対一という緊張や、舞台美術論での作画、作品研究での写本解読等の初体験もあり、大いに刺激を受けた。一方、論文の準備も早くから心掛けた。

私の修士論文の題は「近代における日本舞踊の発生と展開」である。大正期に起こった新しい舞踊運動は、女性

の舞踊家を生み、歌舞伎からの脱却を図って総合舞台芸術を目指した画期的なものであった。にも拘らず、現在では近代の日本舞踊の成立に新舞踊運動が大きく関わったことは余り認知されていない。又、専門的研究も少ない。そこで大それた志をもって近代の日本舞踊研究に挑んだのである。

私の研究はまだ緒についたばかりで本格的にはこれからである。どこまでできるか、己との闘いでもある。時代の流れとはいえ、日本舞踊の勢いがなくなっていることも気がかりなことである。

今回一部ではあったが拙論が学会に採用され、外部に発信できたことは、日本舞踊研究が取り上げられたという意味でも嬉しかったのである。(S35卒)

劇芸術資料整理室から

劇芸術研究室で資料整理のお手伝いをさせていただくようになってから、3年目を迎えました。現在は築地小劇場と文学座を中心に、新劇に関する視覚資料(ちらし、ポスター、舞台写真等)を、スキャナー



資料①



資料②

用いてパソコンに画像として保存することが主な作業です。ちらし等の紙の資料は劣化が進みやすく、資料価値を損なわないためにもパソコン上で保存することが有効な手段といわれています。今回は資料の一つ、昭和13年に初演された「火山灰地」

(久保栄作、新協劇団初演)のちらしは、現状では3点あり、その内1点のみ(以下、資料①)記述されている上演期間が異なります。残り2点(内1点が資料②)は実際の上演期間(6月3日~7月5日)と同じですが、資料①は6月8日~7月8日となっています。

当時、劇団が発行していた『月刊新協劇団』(臨時号)によると劇場の都合により3日から8日に変更になったことがわかりました。①と②のデザインの相違について大学院講師の井上理恵先生に伺ったところ、①は公演が決まって間もなく制作されたもので、②は公演の準備が具体的に進行してからのものではないか、とのこと。

当時の広報誌では大々的に「火山灰地」の宣伝が行われており、宣伝費をかけて2種類のちらしを制作していたことが資料からわかりました。

2種類のちらしは、この公演に対する劇団の意気込みが感じられる資料といえるのではないのでしょうか。 島 洋子 (文芸学研究科演劇学専攻1年)

広場・ひろば

■OGネットが初めて共立祭に参加した時から出展して下さっていた矢田智子さん(S35年卒)が、2008年



シャロットへの想い(100号)

秋、日展の洋画部門に初入選された。油絵を描き始めたのは中学時代からとのこと。日展入選を心からお喜び申し上げます。

■仙葉弘子さん(S33年卒)は「陶研展」(2008年10月)に陶芸作品を出品された。それぞれの土地の「土」そのものにこだわるユニークでのびやかな作品が多かった。

■2007年の共立祭に出展された栗田紀子さん(S38年卒)は「織の仲間展」(2008年9月)に大きなタピストリーなど数点を出品された。プレミッシュ織のもつさまざまな可能性を見せてくれた作品展であった。

■こけし制作の山崎裕子さん(S54年卒)は2009年6月22~27日まで、日本橋小津和紙博物館にて「全国近代こけし展」に出品の予定。創作こけしのすそのを広げるために、浦和パルコにて講習会を実施している。

問い合わせ先 048-885-6233

■松本志穂さん(H4年卒)は白山のアトリエにて「創作ビスクドール教室、エンジェルスガーデン、リアンジェリ」を主宰している(金曜と土曜の午後)。問い合わせ先 090-6318-2828 e-mail angeli_chiho@yahoo.co.jp

■百瀬好子さん(S35年卒)の論文は「歌舞伎—研究と批評」第40号(歌舞伎学会発行)に掲載されている。お読みにになりたい方はOGネットまでご連絡を。

★不況の中、職はもとより住む家も失い、食べるものにも事欠く人々の存在が大きな問題となっている。新しい年を迎えても出口の見えない不況、生きるために必要な最低限の衣食住が満たされている人は幸せといえるかもしれない。だが、それだけでなく、いつの時代にも、生きる支えになるものは必要だ。★本号では、今年の共立祭に

出展していただいた方々に作品の紹介のほかに、創作が生きる支えになっているという思いをつづっていただいた。また、研究成果の発表、「広場」のコーナーでは、作品展など、「つくる」をテーマに、卒業生の活躍を紹介することができた。★第9号から会報をカラー印刷にした。作品や記事の雰囲気よりわかりやすくお伝えできればと考えている。(酒)

編集後記